

翻訳学への招待

古川弘子

1. はじめに

「翻訳」という言葉を聞くと、中学校や高校の英語の授業で行った英文和訳を思い出す人も多いのではないだろうか？しかし「翻訳学」で扱う「翻訳」は英文和訳だけを指すのではない。

例えば、誰かに「おおきに」と言われて瞬時に「ああ、これは『ありがとう』の意味だな」と理解したとき、あなたは翻訳をしたことになるだろうか？（これは、翻訳学では翻訳とみなされる。）また、ある詩を読んで感動しその内容を絵に描いた場合、あなたは翻訳をしたことになるだろうか？（これも翻訳といえる。）私たちは毎日さまざまな形で翻訳と関わっており、翻訳はコミュニケーションに欠かせないものなのだ。

また「翻訳」という言葉は、翻訳されたもの（翻訳テキスト）だけではなく、翻訳するという行為も意味する。つまり「翻訳」について考える「翻訳学」とは、翻訳テキスト、翻訳するという行為、さらには翻訳する人などについて考える学問なのだ。本稿では翻訳学について簡単に紹介したい。

2. 翻訳とは何か？

言語学者ヤーコブソン (Jakobson 2012 [1959]: 127) によると、翻訳は以下の3種類に分けられる。

- (1) 言語内翻訳
- (2) 言語間翻訳

(3) 記号法間翻訳

(1)の言語内翻訳とは同じ言語内で言いかえることだ。上の例のように、「おおきに」を「ありがとう」と頭の中で変換したり、ある表現を別の表現に変えたり要約したりすることを言語内翻訳と呼ぶ。(2)の言語間翻訳は、英語の授業で経験した英文和訳のように、ある言語から別の言語への置き換えを指す。(3)の記号法間翻訳とは、言語によって表現されたものを映画や絵など言語以外の表現に変えることをいう。上の例では、詩をもとに絵を描くことが記号法間翻訳にあたる。

翻訳については紀元前から議論されてきた(マンディ 2009: 28-31)。例えば、紀元前46年に古代ローマの哲学者キケロは自らの翻訳方略について記した。また紀元395年に聖ヒエロニムスは、自分の翻訳への批判を受けて翻訳方略を正当化する文章を残している。翻訳は時に、物議を醸すこともあった(マンディ 2009: 34)。ローマ・カトリック教会は聖書の意味が正しく伝えられることを重視したため、イギリスの神学者ティンダルが英訳した聖書が糾弾され、1536年にティンダルは焚刑に処された。ヘブライ語を含む10か国語を理解したといわれるティンダルによる訳はしかし、1611年に刊行された『欽定訳聖書 (the King James Version)』の基礎となった。

翻訳という行為は歴史を通じて私たちの身近にあったにも関わらず、学問として確立したのはごく最近のことである。その理由の一つに、翻訳は外国語教育で文法を学ぶための手段、または外国語を読むための手段としての地位しか与えられてこなかったことが挙げられる(マンディ 2009: 11-12)。翻訳学を示す Translation Studies という言葉が使われたのは1972年のことで、ホームズ(Holmes 2006 [1972])が Translation Studies という学問領域を定義したのが、現在の翻訳学の始まりといわれている。翻訳

翻訳学への招待

学の大きな特徴は、文学、言語学、哲学、カルチュラル・スタディーズ、社会学、歴史学などといった様々な学問分野の知見を取り入れることで発展してきた学際的な学問であることだ（マンディ 2009：21）。

3. 翻訳学とは何か？

では、翻訳学とはどのような学問なのだろうか？ 翻訳テキストと原文とを比較研究することも一つのアプローチである。翻訳テキストに焦点を当て、「翻訳テキストとそれを受け取る社会との関係」について考えることもできる。また「なぜそのテキストが翻訳されたのか、または翻訳されなかったのか」について研究することも翻訳学の範疇に入る。さらには、ある翻訳テキストとそれを訳した翻訳者の政治的、経済的または社会的な状況との関係性を詳らかにする研究もある。

このように翻訳学の研究は多岐にわたるが、今回は「翻訳テキストとそれを受け取る社会との関係」について二つの例を紹介する。最初の例は、マーガレット・ミッチェル著『風と共に去りぬ』に見ることができる。この小説には黒人の使用人が出てくる。物語を通して一度も名前が示されず、白人の子守をする黒人という意味を持つ「マミー」としか呼ばれないこの女性は、「(……) 言ったでねえが」や「(……) なんもいいこだあねえって」などと東北弁で話しているように訳されている。以下に三種類の翻訳テキストを示す。

「あなたはときどき、すこし気が強すぎることがありますだよ、スカーレット嬢さま。へびだのねずみだのが出たときには、いっそ気をうしなったほうが体裁がいいだ。(……)」

(大久保康雄・竹内道之助訳 1977：165)

翻訳学への招待

「ミス・スカーレットさま，威勢がありすぎますで。へびだとか
ネズミなんぞ見で気絶もなさんねえようじゃあ，体裁悪いったらねえ。
(……)」 (荒このみ訳 2015: 184)

「スカーレット嬢ちゃんはときどき威勢がよすぎるんですよ。へび
だのネズミだのが出たら，気絶のひとつもしないとみっともないって，
言ってきたでしょうに。(……)」 (鴻巣友季子訳 2015: 175)

これらの訳を比較してみると，鴻巣訳ではマミーの会話文には標準的な言葉が使われている一方で，他のテキストでは東北地方の方言のような言葉があげられていることが分かる。ちなみに，主人公のスカーレットは全ての訳で標準語を話し，女らしい言葉遣いをする。これはなぜか？白人であり農場主の娘でもあるスカーレットと黒人の使用人マミーとの権力関係が，日本語における標準語と東北方言との関係に置き換えられて訳されているからだと考えられる(金水 2003: 184-187)。加えて，マミーの言葉遣いには東北方言と他の地域の方言に対する日本人の意識も現れている。東北方言に対する差別的な視線が 2015 年に出版された荒このみ訳でも見られることは，指摘されるべき点であろう。

次の例は「ハリー・ポッター」シリーズに登場するハーマイオニーの会話文に見られる。物語の中で，11 歳の少女ハーマイオニーは「あら，魔法をかけるの？ それじゃ，見せてもらうわ」(松岡佑子訳 1999: 157)などと話す。日本人の同年代の少女に比べると，不自然なほどに女らしい話し方をするのだ。言語学者の中村はハーマイオニーの言葉遣いに関してこう述べている。

翻訳学への招待

「(……) もし若い女性がハーマイオニー・グレンジャーのような話し方をすれば、友達をなくすだろう。(……) 彼女の話し方はとてもお高くとまっていて、まるで『私はあなたたちとは違うのよ』や『私ってこんなに女らしいいい子なの』などと言っているかのようだ。これは、日本のハーマイオニー・グレンジャー世代の女性が使うような言葉ではない」 (Nakamura 2015 : 4, 筆者による翻訳)。

中村 (2010 : 23) は「現在もっとも典型的な女ことばを話しているのは、日本人女性ではなく、翻訳のなかの外国人女性なのである」とも指摘している。外国人女性の会話文が非常に女らしく訳されるのは、翻訳者の持つ規範が訳文に影響を与えているからだと考えられる。規範とは、社会において私たちの行動などについて適切であり従うべきであると期待されるようなもののことだ。私たちは翻訳をする際、規範の影響を強く受ける (Toury 2012 : 61-77)。ハーマイオニーの話し方の例では、「日本語には女ことばというものがあり、女性はこれを使うべきだ」という考えが訳文に現れたと考えられるだろう。

上の二つの例が示すように、翻訳するという行為や翻訳されたテキストは、そのテキストが属する社会と強く結びついている (Even-Zohar 2012 [1978] : 163-164)。日本語に訳されたテキストであれば、日本の歴史、政治、経済、社会や文化などと切り離して考えることはできない。したがって、「翻訳テキストとそれを受け取る社会との関係」について考えるとき、私たちは単に翻訳テキストのみを研究しているのではなく、日本社会について研究しているともいえる。

7. お わ り に

本稿では、翻訳学という学問について概観してきた。翻訳学で扱う翻訳とは、英語学習における英文和訳よりも広範にわたるものだ。翻訳研究は欧米中心に行われてきたが、近年では日本でも活発に行われるようになってきた。本稿をきっかけに翻訳学に関心を持つ人が増えることを願う。

参 考 文 献

- Even-Zohar, Itamar. (2012 [1978]) “The Position of Translated Literature within the Literary Polysystem.” In L. Venuti, ed., *The Translation Studies Reader* (3rd edn). London and New York, Routledge: 162-167.
- Jakobson, Roman (2012 [1959]). “On Linguistic Aspects of Translation.” In L. Venuti, ed., *The Translation Studies Reader* (3rd edn). London and New York, Routledge: 126-131.
- Holmes, James S (2006 [1972]). “The Name and Nature of Translation Studies.” In L. Venuti, ed., *The Translation Studies Reader* (2nd edn). London and New York, Routledge: 180-192.
- Nakamura, Momoko (2015). *Honyaku ga tsukuru Nihongo*. Japanese and Gender, No. 15: 1-11.
- Toury, Gideon (2012). *Descriptive Translation Studies and Beyond* (Revised edn), Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- J.K. ローリング著, 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』(1999) 静山社
- ジェレミー・マンデイ著, 鳥飼玖美子監訳 (2009) 『翻訳学入門』みすず書房.
- 中村桃子 (2010) 「女ことばの歴史—メタ言説からみる新しい視点」, 中村桃子 (編) 『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社, pp. 19-34.
- マーガレット・ミッチェル著, 大久保康雄・竹内道之助訳 (1977) 『風と共に去りぬ 第1巻』新潮社
- マーガレット・ミッチェル著, 荒このみ訳 (2015) 『風と共に去りぬ 第1巻』岩波書店
- マーガレット・ミッチェル著, 鴻巣友季子訳 (2015) 『風と共に去りぬ 第1巻』新潮社